

## 周辺からの記憶 42

# 2021 年度 福島

村本邦子（立命館大学）

2024 年 2 月、ニュージーランドを訪れた。ニュージーランドにはマオリのための大学が 3 校あるそうだが、一般の大学にもマオリ学部というのがある。今回、ワイカト大学のマオリ学部のモアナ（ワカレモアナ・ワイトキ）先生のお招きで、大学を訪問した。モアナ先生は臨床心理学者で、ニュージーランド心理学会の会長を務めたこともある。たまたま入学式の日で、光栄にもマオリの儀式に則った大変美しい入学式に出席させて頂いた。マオリは集団で歌いながら少しずつ客人を招き入れる。ゲストたちは返礼の歌を歌いながら、少しずつ中に招かれていく。何か問題があれば、途中で中断され、訪問がキャンセルされることもあるという。入学式でも、ホスト側（大学関係者）の主導で、少しずつゲスト側（新入生たち）が迎え入れられていった。低く太い声と身体の動きで、エネルギーの波動が場全体を包み込んでいくのを感じ、感動した。歓迎の歌と踊りが終わるとスピーチだが、これもホスト側とゲスト側が交代で次々に対話を重ねていくような形で進行し、一人のスピーチが終わるごとに返礼の歌が歌われた。

マオリ学部のサイコロジストたちに「いかにして日本の心理学は脱植民地化し、土着心理学を創れるのか？」と題する小さなプレゼンを行ったが、プレゼンに対しても常に返礼の歌が歌われるそうで、みなさん起立して、私のために歌ってくださった。何だか気恥ずかしくもあったが、とても大切に扱われていると感じた。その後もみなさんにとっても丁寧にもてなされ、マオリの人たちがいかに関係を大切にするか身を持って知った。マオリの人たちの土地に対する考え方、人やものに対する考え方にはとても共感する。たとえば、目の前に一人の人がいる時、そこにあるのは独立した個人ではなく、家族や友人や祖先などたくさんの関係性につながれた人なのである。東北の文化もそうであるが、植民地主義を内在化してしまっている日本の脱植民地化の方法は、植民地化された文化の多様性を学ぶことなのだと改めて認識した。



## 福島ミュージアム

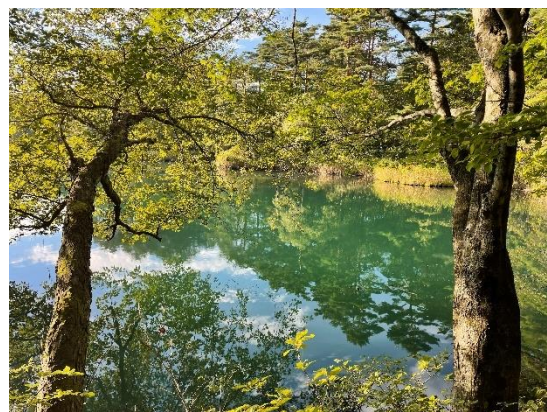
9月10日

### 日本赤十字社平時災害救助発祥の地

少し時間は遡るが、2021年9月の夏休み、福島のフィールドワークをした。まずは一度行ってみたかった五色沼群へ。福島に来るようになって、あちこちで写真を眼にするようになり、是非一度は訪れてみたいと思っていた。とても美しく妖艶であり、途中、何かに化かされる経験もした。次回はこの辺りに一泊してゆっくり過ごしたいと思った。

昆沙門沼に「日本赤十字社平時災害救助発祥の地」という記念碑を見つけた。説明版によると、1888（明治21）年午前7月15日7時45分頃、磐梯山が突如爆発し、死傷者500人を超える大惨事となった。日本赤十字社は医療救援者3名を派遣し、地元猪苗代町の医師ともども、昼夜の別なく、治療、診療を展開した。世界赤十字社は、当初、戦時救護を目的として誕生したが、その後、平時救護を正式に活動対象に加えることにしたのは、国際機関である赤十字社連盟が設立された1919年以降であり、先駆的な取り組みであった。1989年、百周年にこの「日本赤十字社平時災害救護発祥の地」の碑を建立したという。

偶然、出会った碑だったが、初めて知った。猪苗代湖を通してその夜は会津の東山温泉に泊まる。大正ロマンの雰囲気漂わせる洒落た温泉街だった。





## 9月11日 アウシュビッツミュージアム

### 福島菊次郎「捨てられた日本人」

翌日、約束していた白河の原発災害情報センターへ向かったが、なぜか鍵がかかっていたため、同敷地内のアウシュビッツミュージアムの方に入る。受付の人に原発災害情報センターのことを尋ねてみると、怖い顔をして両腕でバツを作り、奥に消えてしまった。とりあえず、今回の目的とは違うが、アウシュビッツミュージアムを見ることにする。こちらは何度も来ているが、いつものようにアウシュビッツについての20分映像を観てから展示を見る。

ちょうど、福島菊次郎の特別展「捨てられた日本人」をやっていた。広島のある家族の記録で、原爆で妻を亡くし、子どもたちを養うために原爆病を抱えながら「狂気の漁」に出ていた男の物語。子どもたちはそれぞれ家出していく。一人の女の子はキャバレーで働き始め、一人は四国の士族の娘と偽って水商売をするが、それに伴い、生活保護から金額が差し引かれていく過酷さ。被写体である中村さんは、被爆に苦しんだ自分の写真や困窮しつくした現状を見せつけることで世に告発していた。福島菊次郎は、1921年山口県の生まれ。1960年「ピカドン ある原爆被災者の記録」で日本写真批評家賞特別賞を受賞。プロの写真家として総合雑誌グラビアに発表していたが、1982年第一線を離れ瀬戸内海で自給自足生活を始める。1988年病のため断念し、翌年から自作のパネルで写真の巡回展を始める。2015年、94歳永眠。

水俣病や原発とも結びつく興味深い展示だった。



## 三春町民族資料館・自由民権記念館

三春町歴史民俗資料館には自由民権記念館は併設されており、一度、来てみたいと思っていた。

三春町は、自由民権運動発祥の地として、東北の民権運動をリードした多くの民権家を輩出した町である。明治政府は専制政府で、社会のしくみを変える改革を次々に進めたものの人々の生活は良ならず、国民の自由を守り権利を主張する場もなかったところから、人々が国政に参加し、自由と権利を獲得することを目的に、自由民権運動が全国的に広がった。

三春町出身の河野広中は、多くの同志たちと民権運動に参加し、三春に政治結社「三師社」、青年活動家を養成する学塾「正道館」を創設し、数多くの運動家を育てた。また、関東・東北地方では例のない政治雑誌「三陽雑誌」を発刊した。三春は東北地方最大の自由民権運動の中心地となった。

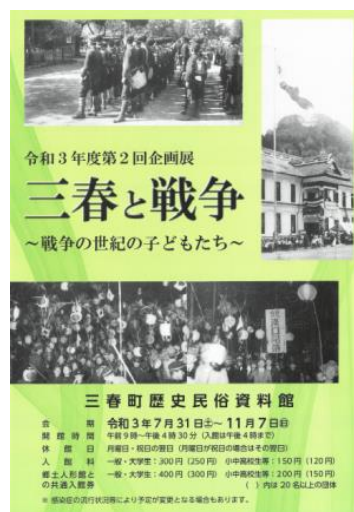
このような動きに対し、明治 15 (1882) 年の秋に起こった喜多方事件を好機として、明治政府の力を背景とした福島県令三島通庸は大弾圧を強行し、河野広中、田母野秀顕ら三春町出身者 10 名を含む、58 名の運動家を逮捕した。この事件は「福島事件」と呼ばれ、河野と田母野ら 10 名が有罪とされた。

福島事件以後、自由民権運動は全国で激化、茨城県で「加波山事件」と呼ばれるこの運動が起こるが、これも失敗に終わる。三春出身の山口守太郎は獄死、琴田を含む 7 名が死刑、河野広体 (広中の甥) ら 5 名が無期徒刑となるなど、多数の人

が処罰された。このような運動の高まりの結果、明治政府も国会の開設、憲法の発布を検討するようになり、1889 (明治 22) 年、大日本帝国憲法発布、翌年に第 1 回衆議院選挙が行われ、帝国議会が成立したのだという。



歴史博物館では、ちょうど「三春と戦争～戦争の世紀の子どもたち」という企画展をやっていた。第一次世界大戦、日中戦争を経て第二次世界大戦へと続く戦争の世紀の中で、三春の人々がどのような暮らしをしていたのか、1927 年 (昭和 2 年) 分から保存されていた三春尋常高等小学校 (その後国民学校) の日誌をもとに子どもたちの「戦争」を展示したものだだった。



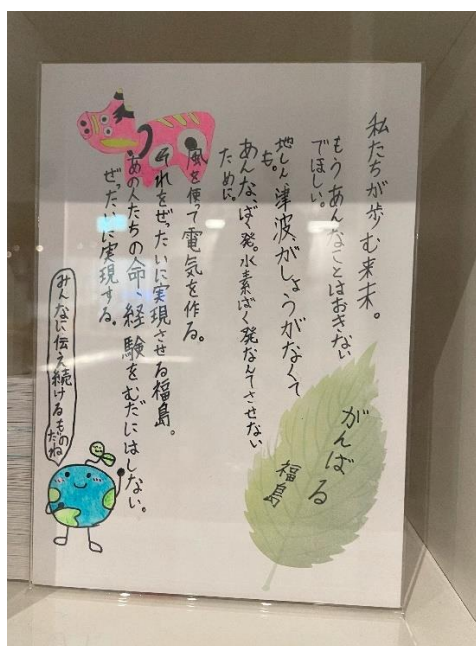
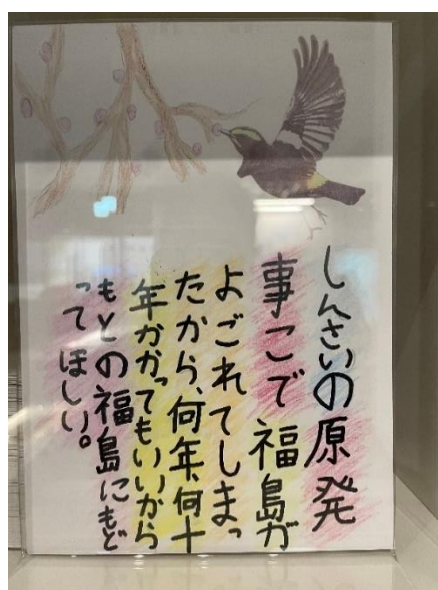


## コミュタン福島

それからコミュタン福島へ。展示内容はそれほど変わっていなかったが、今ではスタッフの緊張感も緩み、未来のメッセージでは、そのまま打ち込んだ文字がボードに表れるようになっていた。ただし、黒字で直後に一度現れるだけで、カラフルな文字として残されるのは選抜されているようだった。

ジオラマで事故後 2019 年までの線量の変化を見せる展示があり、これを見ていると、少しは高い所も残っているが、時間経過や除染を経て、たしかに線量は減っているのだと感じられる。しかし、使われている数値は測定された地点のみであり、山林はじめ今なお高い数値を示すところの情報は反映されていないのである。これはトリックであり、詐欺のようなものだと思う。

また、見学に来た子どもたちのメッセージカードが並べられており、一枚一枚読んでいくと、胸が痛む。子どもたちにこんな思いをさせてきた大人社会を恥じるばかりである。同時に、すでに震災や事故を知らない子どもたちになってきたことを感じる。時間は流れているのだ。



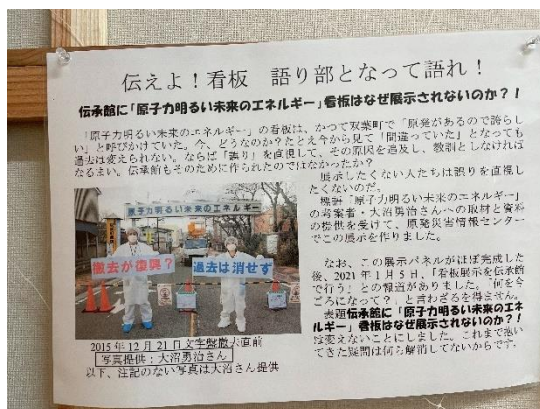
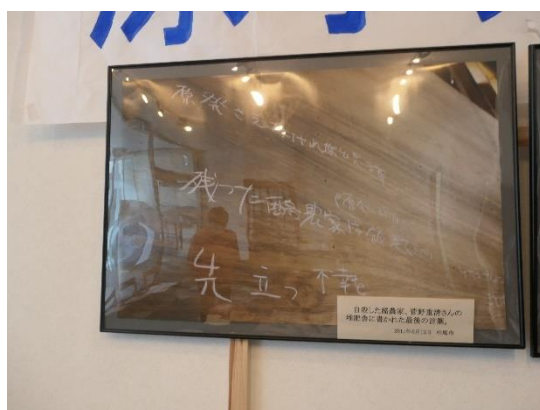
## 9月12日 原発災害情報センター

その夜は土湯温泉まで戻って宿泊していたが、原発災害情報センターからメールが入り、「きのうは待っていた」と。どういふことかわからず混乱したが、いろいろ調べてわかったことは、現在、「原発災害情報センター」というのがふたつ存在し、ネットから連絡して予約メールを入れたが、これまでも何度か行ったことがあるので、白河のセンターの方に行ったが、現在は大工町の方にあるのだという。ネット上には「乗っ取り」という言葉も見られ、穏やかならざるものを感じるが、もう一度行ってみることにして、白河まで戻った。

住所を頼りに行ってみると、ガラス越しに豊田直己さんの写真が見えていた。ビルの1階を借りて、たくさんの写真や資料が所狭しと展示されていた。

実物大の「原子力明るい未来のエネルギー」の標語の下に、「原発さえなければ」と書いて自死した酪農家の遺言が書かれた壁の写真がある。「遺言 原発さえなければ」という映画にもなったものである。また、小学生の時に標語を考えた大沼勇治さん夫婦が看板撤去に抗議した写真とともに、それを所有する原発災害伝承館がなぜそれを展示しないのかという抗議文もあった。

鹿児島県にある川内原発の再稼働反対の裁判闘争の市民運動も紹介されてあった。





タイベックスーツの代用として使われた実物の雨合羽、女性用外作業帽子、ゴム手袋、マスクの展示もあった。提供者は福島第一原発から2キロのところにある双葉厚生病院の医師で、原発事故時、入院患者の治療に当たっていた。突然タイベックスーツに身を固めた自衛隊員が現れ、「避難しろ」と告げられた。「絶対安全」の神話のもと、病院にはタイベックスーツは配備されていなかったため、代用として利用されたのがこの雨合羽だったというのである。



案内してくれたスタッフのお話を聞いたが、元あった原発災害情報センターの建物の所有をめぐるトラブルになっており、やむなくこの地で展示をしているということだった。とても残念な話である。早めに解決して欲しい。

## いわき・古滝屋「考証館」

それからいわき市に向かう。今年の3月12日、いわき湯本温泉古滝屋に開館した「原子力災害考証館 furusato」を訪ね、宿泊した。この宿は、たまたまかつて泊ったことがある。部屋には三百年を越えるという宿の歴史がまとめられていた。原発事故に見舞われ途方に暮れていた第16代目社長、里見喜生さんは何度も先祖の墓を詣り、「父なら、先祖ならどうしただろう」と自問し、苦難を乗り越えてきたという。古滝屋には過去にも2度、存続の危機があり、常磐湯本の地で旅館を営む一人の経営者として、また多くの喪失を体験した一人の被災者として、歴史を残すことは、自分に課せられた大きな課題だと認識するに到る。その里見さんがこんなミュージアムを開設した必然性がよく理解できた。

旅館を復旧させる傍ら、被災状況を伝えるツアーを始めていたが、伝承活動の事例を学ぼうと水俣市を訪れ、水俣病に関する市の資料館や民間が運営する歴史考証館などを視察し、公的施設と民間施設が異なる視点で資料を展示し、補完する重要性を学んだそう。名前も「考証館」を受け継いでいる。

「しまくらまさし写真展 フクシマの10年」の特別展の他、娘さんを亡くした大熊町の木村紀夫さんのインスタレーション、中筋純さんの写真と三原由起子さんの短歌を抱き合わせた展示、関連の新聞記事、裁判の記録など貴重な記録が展示されていた。木村紀夫さんは津波で次女と妻と父を失くした。行方不明になった3人を夜を徹して探したが見つからないまま、原発



原 子 力  
災 害  
考 証 館





それから、考証館のFスタディツアーに参加した。汚染土を運び出すゼッケンをつけたトラックがたくさん走っている。

双葉駅周辺では、あちこちバリケードがあり、その向こうには家の駐車場にポルシェなど高級車がそのままに置かれていた。

桜で有名な夜ノ森の駅は、東京オリンピックに合わせて2020年3月14日に全線開通した常磐線の駅だった。駅前の線量計は $0.185\mu\text{Sv}$ だが、近くの草むらは $10.1\mu\text{Sv}$ という異様な状況だった。しかも、線路を挟んで東側は今も帰還困難区でバリケードがはられ、西側では避難解除され人の住む住居や車があった。何と言っていいのかわからない。言葉を絶する。









## 9月13日 伝言館

古滝屋に宿泊して、翌日は檜葉町大谷の宝鏡寺境内にできた「伝言館」を訪問する。このミュージアムは、長年、原発反対運動に取り組んできた早川篤雄住職が賠償金など私費を投じて建設したものである。早川住職が館長で、立命館大学名誉教授の安齋育郎さんと東邦大学名誉教授の桂川秀嗣さんが副館長ということで、三人みなさんで迎えてくださった。

展示を見せて頂く。1階には原発推進を謳う旧科学技術庁のポスターや除染の写真、汚染水や震災関連死についての説明パネルなど約100点を展示している。地階では広島、長崎の原爆被害に関する資料、米国の水爆実験で被曝した第五福竜丸などの展示があった。

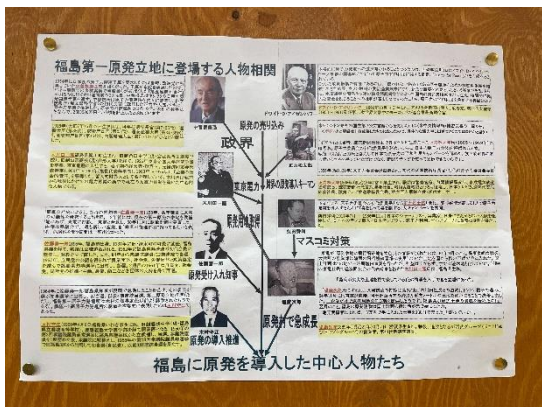
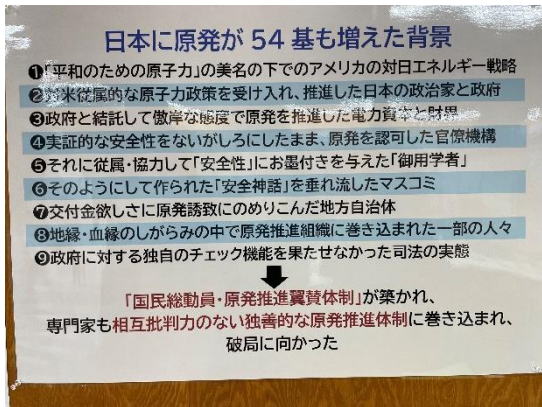
3人は始終楽しそうに戦争展示（沖縄やアイヌ）の準備をしていらっしやった。これから浪江の測定に行くという。エゴマアブラのかすで何か作れないかと、最初は石鹼を作って京都の石鹼会社に怒られたが、次は和蠟燭を作り、京都の蠟燭屋の協力も得て、付加価値もつき、これから道の駅などで販売するそうだ。

庭には、「電力企業と国家の傲岸に／立ち向かって40年力及ばず／原発は本性を剥き出し／ふるさとの過去・現在・未来を奪った 人々に伝えたい／感性を研ぎ澄まし／知恵をふりしぼり／力を結び合わせて／不条理に立ち向かう勇気を！／科学と命への限りない愛の力で！ 2021年3月11日 早川篤雄・安齋育郎」と刻まれた「原発悔

恨・伝言の碑」があり、約30年間、東京の上野東照宮境内で灯されてきたという「非核の火」が燃えていた。



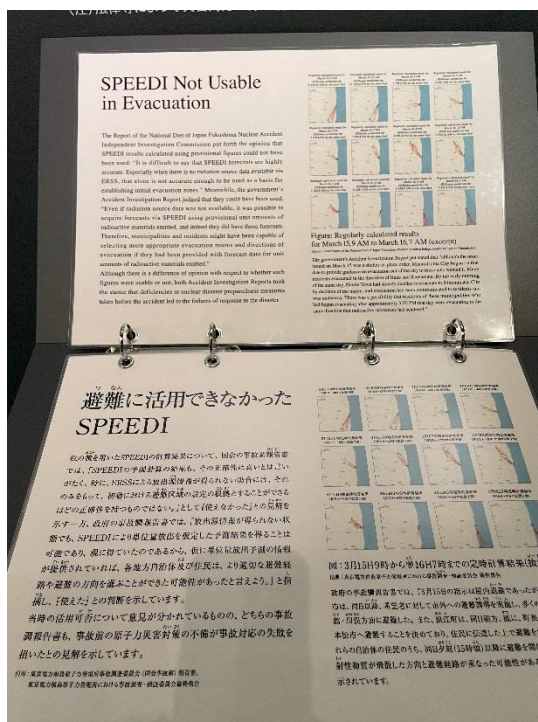


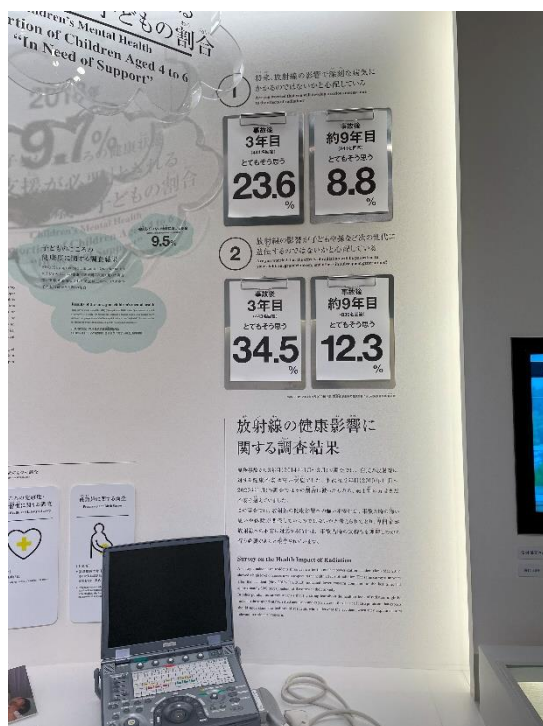




**原発災害伝承館**

伝承館では、まず外にある看板を見てみた。レプリカで標語は違っていた。4つの標語を交替で出すらしい。最初のコーナーでは、スタッフ（元小学校の先生だったらしい）が、アトムかばん、行政や学校や電力会社がどんなふうにくっついて離れがたいものになっていたかという説明してくれる。これが人災であること、SPEEDI が避難に活用されなかったことなどの展示はあったが、放射線による健康被害に関する問題はあたかも心理的問題であるかのような説明には大きな問題を感じた。





## 東日本家族応援プロジェクト in 福島 2021

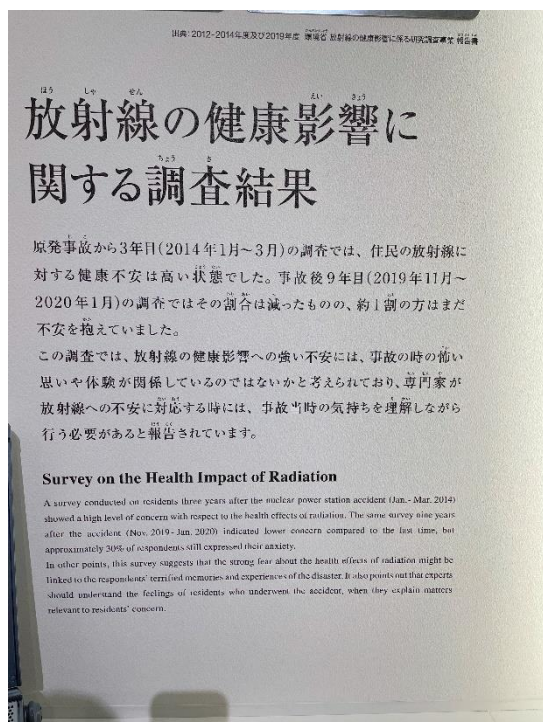
### 12月3日 山元町中浜小学校震災遺構へ

12月3日から5日、最終回となる福島でのプロジェクトだが、今年は毎年会場にしていた「こむこむ」が使用できず、福島、白河、いわきの三拠点での活動に加え、前後、途中で、参加メンバーがグループに分かれて自主的フィールドワークを行うことになった。

私自身は前乗りして、12月1日、授業を終えてから新幹線に乗り、東京駅まで出て、1泊したが、深夜1時過ぎに大きな地震があって目が覚めた。山梨で震度5だったようだ。

翌朝、新幹線で福島まで行き、河野さんにピックアップしてもらった。相馬の鎮魂記念館に行く予定だったが、グーグルマップを見ると山元町が案外近いことがわかったので、予定変更してそちらに向かう。民俗資料館を見てから中浜小学校遺構へ。途中、『巨大津波』に登場する八重垣神社を見た。夢いちごの郷で、ホッキ弁当といちごとりんごを買った。

中浜小学校震災遺構で受付をすると、坂本中学の校長だったという方が案内してくださった。小学校前に立つと、校舎の上の方に津波の高さがわかる。運動場に3本の旗掲揚ポールがあるが、その高さは津波に合わせてあるという。運動場の棒が気になって聞くと、日時計だということだった。時間がわかるが、2時46分のところに石があり、3月11日にぴったり合うようになっているそうだ。銀の棒の色は小学校の時間割を表





している。中央の丸い銀には過去の地震津波とその場所の方角が記されている。福島第一原発 60 キロの表記もあった。

中浜小学校はおしゃれな感じのする建物で、平成元年に新校舎を建てた。その時、町の人たちの強い要望で2メートルのかさ上げをした。これがなければ、屋上まで水に浸かっていたかもしれないということだった。「紙芝居を見ました」と言うと、とても驚かれて、「映像が見られますよ」ということなので、「是非お願いします」と頼んだ。

校長室、天井にひっかかった竹馬やのり。給食室。あの日の給食はカレーだったので、子どもたちはみんなおなかいっぱい食べて、一晩食わずでも何とかしのげたのだそう。ずっと気になっている子どものことを聞いてみたが、その後のことは知らないが、「あれほどの体験をしたら誰でもおかしくなってしまうですよ」としみじみ言う。「中学は大丈夫でしたか？」と聞いてみると、高いところにあるので、運動場までも水は来なかったということだった。中学校は、もともと小学校の避難所になっていたそう。

2階にあがると音楽室で映像を観ることができた。映像の中で亡くなられた庄司あいさんが紙芝居を読んできた。こんなところでお会いできるなんてと、胸がいっぱいになった。もうひとつの映像は(2本見せることはふつうないらしいが、今日は他にお客さんがいないから特別にとスタッフが言い、後でも、別のスタッフが最初で最後と言っていた。なぜなのか少し不思議ではある)、おもに当時の校長先生と門間先生(紙芝居を作った先生)の話だった。屋上に上がるこの階段を90人が上り、校長は最後に上ったが、「上がったら死ぬか助かるかのどち

らかしかない」と腹を括ったそう。

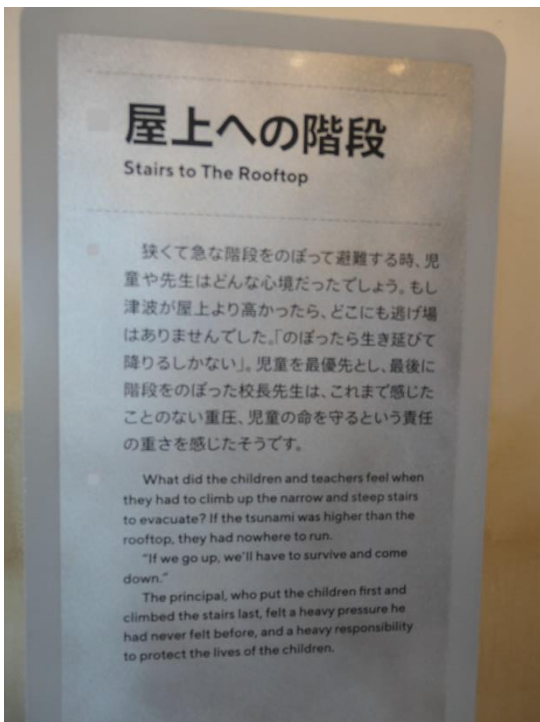
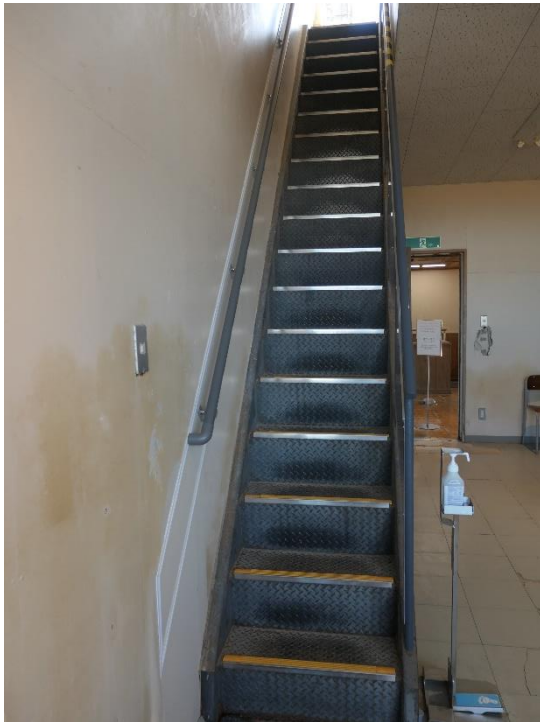
最後の方で、PTA 会長が出ていて(子どもを預けていた保護者ということになる)、「何がよかったのか誰にもわからない。でも、幸運が重なってよかったと」と。偶然がいくつも重なっていることが強調され、大川小学校をはじめ犠牲の出た学校への配慮を感じた。

スタッフが交代し、階段を上って屋上を案内してもらう。子どもたちが一夜を過ごしたという倉庫。その中はあの時のままだという。撮影禁止になっていた。当時の子どもたちが訪ねてくることがあるかどうか聞くと、ほとんど来ないとのことだった。





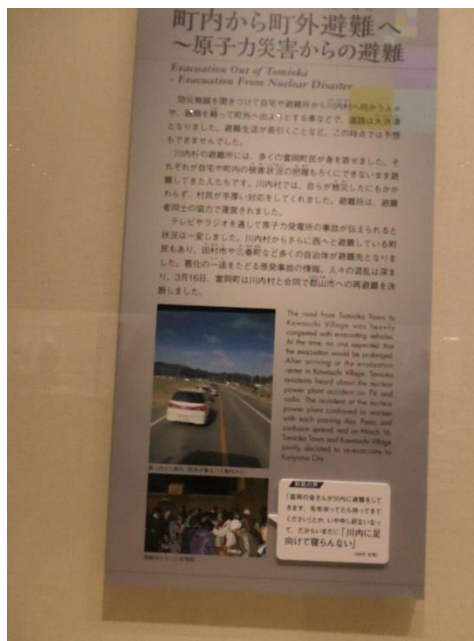




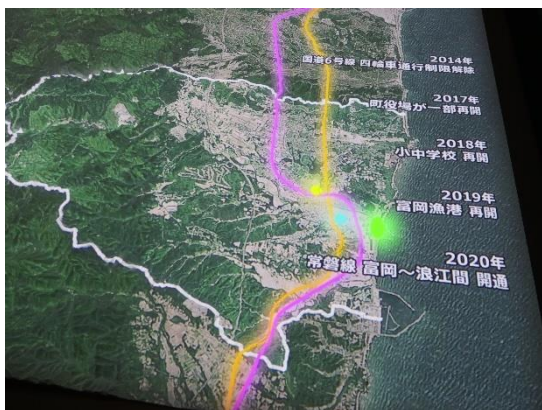
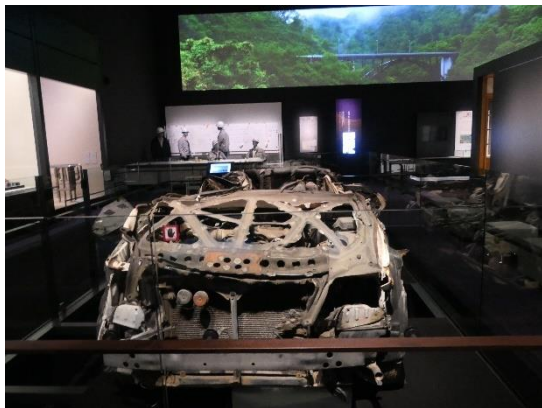
## 富岡アーカイブ

だいぶ時間を喰ったので、相馬の伝承館を飛ばし請戸小学校に向かうが、時間がなく閉館で、そのまま富岡アーカイブへ行った。町の歴史を残そうという姿勢が感じられた。原発誘致の正当性を伝えようとしている印象はあった。前半は地震津波中心だったが、後半は原発避難の話で、復興の強調はなかった。しかし、病気のリスクなどの話もなかった。

津波でひしゃげたパトカーや当時の災害対策本部の等身大模型などは、とてもリアルに感じられるものだった。







## ふたばインフォ.

それから、ふたばインフォに立ち寄る。双葉郡の各町村のコーナー展示。写真と関連図書。図書としては幅広く置かれていたと感じがする。



## ならは CanVas

暗くなってきたので、急ぎならは CanVas へ。おしゃれなきれいな会館だが、中は交流スペースになっていて、使いやすそうだなと思ったが、伝承館登録されているにしては伝承に関するものはほとんどなく、ごく一部の写真展示のみだった。



## 12月4日 飯舘村へ

二本松の岳温泉に泊まり、翌朝、8時半出発で飯舘村へ向かう。途中、飯舘村の極久里珈琲を通ったので、店を覗いてみたが、パンを売っていた。道の駅に立ち寄ってから、長谷川健一さん宅を弔問のために訪れる。

そこまでのところは、ほとんど線量は  $0.1 \mu\text{Sv}$  以下だったが、長谷川さん宅の前の道路、向こう側にフレコンバックが丘のように積み上げられ、横にはススキがぼうぼうと生えているようなところは、モニタリングポストが  $0.35 \mu\text{Sv}$  を示していた。

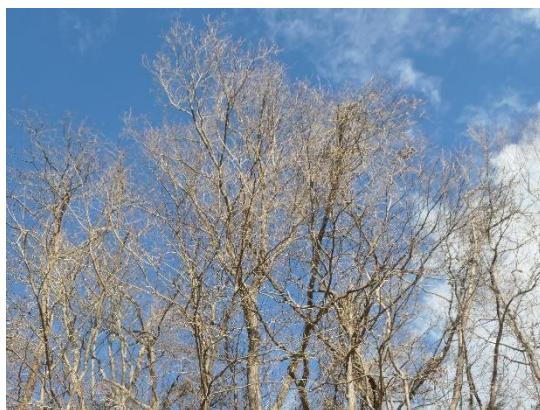
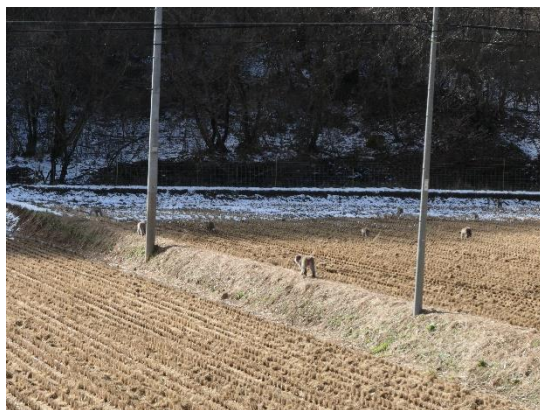
長谷川花子さんにご挨拶をしてお焼香させて頂く。花子さんが経過を話してくれる。2月に「声が枯れているね」と病院へ行くと、「大きい病院で検査した方がいい」ということで3月検査に行き、「癌です」と言われた。医大を紹介され、手術することになったが、たくさんありすぎて取り除けなかった。放射線治療、胃ろうもした。8月、「蕎麦をやらないと」とドクターに相談し、いったん帰ってきて、段取りをする。仲間たちに後を頼むが、みな高齢なので、息子と婿がやってくれて、仲間がバックアップした。結局、おとつい終わったばかり。長谷川さんは何もかも自分でやっていたから、引継ぎもないまま、自分がやることになった。

最後の日、朝、珍しく電話があり、「充電がなくなるから充電器を持ってきてくれ」と言い、コロナで会っていないからか、「会いで会いで」と言っていた。それが午後、突然急変したと連絡あり、自分も带状疱疹で片目がつぶれ、目が見えにくいなか運転して駆けつけた。原町の方へドクターとともに移動していたが、たまたまドクタ



一の休日で、急に腫瘍が破裂して大量出血、本人もそのつもりはなかったと思う。延命を聞かれて、苦しみが続くだけだからと断っていた。明日が49日だと言う。

辛い話だった。尊敬すべき素晴らしい先輩方が次々に鬼籍に入られていく。十年続けるということはこういうことなのだとしみじみ思う。飯館はかすかに雪景色で、人のいない田んぼには猿たちがたくさんいた。



## 福島は今、そしてこれから

福島駅に戻り、それぞれにフィールドワークを終えた皆と合流し、初年度よりお世話になっている「NPO 法人ビーンズふくしま」の理事中鉢博之さんのアレンジで、「福島の今、そしてこれから」というテーマで、「一般社団法人ふくしま連携復興センター」のみなさんのお話を聞いた。

「ふくしま連携復興センター」は、福島大学災害復興研究所や県内の NPO とともに、2011 年 7 月に設立され、12 月に法人化された。様々な支援のコーディネートやネットワークづくり、情報発信、事業連携・協働推進をサポートする中間支援組織で、「東日本大震災・福島第一原子力発電所事故が投げかけた課題を教訓として、その課題解決に取り組み多様な主体が連携を深化させ、人口減少・経済格差・社会的孤立の拡大防止に取り組む『共に助け合う市民社会・ふくしま』を目指す」としているとのこと。

復興庁の資金で動いている被災者支援コーディネート事業と、県の委託事業としてやっている福島県県外避難者への相談・交流・説明会事業、福島県復興支援専門員設置業務委託事業の 3 事業を中心に、福島県にある社会資源をつなぐことや、お互いの事業を知り合うことなどでより機能的に被災者支援ができるような事業、全国 26 か所に生活再建拠点を設置し、県外避難者が県内へ戻る時の相談や支援、また県外で住む人への相談・支援等を行っている。

ふくしま連携復興センター（2021）『FUKUSHIMA の 10 年—震災・原発事故に向き合った市民団体 50 の物語』という本を頂いたが、福島の復興に向けさまざまな

NPO がさまざまな取り組みをしていることがわかる。

4 名のスタッフたちの被災時の経験やどのような思いで現在働いているかという話も聞かせて頂けたことが興味深かった。スタッフは全部で 4 人いらっしゃり、自己紹介が興味深かった。

最初の人は、福島出身で塾経営をしていたが、子どもが生まれ、転職を考え始めた時にこの仕事に出会った。二人目の女性は、福島市出身で妊娠中だった。子どもの未来のためにできることをしたいとこの仕事を始めた。三人目の男性は横浜出身で、ジャパン・プラットホーム、NGO で途上国の支援などしていたが、一番乗りで福島に拠点を作った。そのほかの国際 NGO は、当初、50 キロから 80 キロ圏内でしか活動しなかった。福島の拠点を引き上げたので、こちらの仕事に変わった。最後の女性は、福島市で震災の時中学生だった。大学生になって、観光 PR で、あちこちで福島のものを食べてもらう取り組みをしているということだった。若い力を頼もしく感じた。







## 極久里珈琲

その後のビーンズふくしまの運営する「みんなの家」の訪問は、人数制限があったため、今回初めての訪問となる院生5名に譲り、私たちは、毎年お世話になり、去年はコロナ禍でオンラインとなったため、漫画展会場も引き受けて頂いた極久里珈琲を訪問した。



極久里珈琲は、自分たちのリズムを狂わせていけないと、コロナ禍でも一度も店を閉めず、売り上げは2割も落ちなかったから、支援金申請もしなかったということだった。さすがである。どこへも出かけられない、人とも会えない時、人のぬくもりを感じながら、静かに美味しいコーヒーを飲む時間がどれほど人々を慰めてきたことだろうかと思う。



マスターが、「きのう配達で飯舘村を通ったら雪が降っていた」とおっしゃったので、「私たちは今朝行ってきて、まだ少し雪が残っていましたよ」とお伝えした。

マスターが、「復興と言うのは、元の村に戻るのではなくて、何かまったく新しい町ができるということなんだな」とポツリと言ったことが胸に刺さった。美しい飯舘村の極久里珈琲は他者に貸して今はパン屋さんになっていた。市澤さんご夫婦が、どれほど寂しく残念な思いをされていることだろうかと思っていたばかりだった。十年の年月が経てば、どこであっても町が同じであることはないのだろうが、これは、自分たちの営みや思いとはかけ離れたところで起きた変化である。



それから、駅の照井で円盤餃子を食べ、翌日のプログラムに向けて白河へと移動した。

## 12月4日 白河プログラム

今年は「こむこむ」が使えず、毎年プログラム協力頂いている小磯さんの属する「NPO 法人しらかわ市民活動支援会」との共催で、市民交流センター「マイタウン白河」にてプログラム開催となった。このNPOは、このセンターで、市の委託を受け「おひさまひろば」を運営している。子育て支援や情報交換の場として、親子で遊べるスペースの中で親子の交流や、子育ての相談ができ、ひろばには、保育士をはじめ、子育て研修会で学んだサポーターらが活動している。お誕生会や季節のイベント、歯科衛生士や助産師による相談事業、親子向けのセミナー等も行っているとのことである。

例年のように、漫画展の他、プログラムとして、漫画トーク、「カプラに挑戦しよう」、「クリスマスカレンダーを作ろう」だった。それにコミュニティ・カフェ EMANON の協力で、高校生6名がボランティアで加わってくれた。

### 漫画展、漫画トーク

漫画展には、「それぞれの人が持つ、悩みに寄り添うこと。関わることのむずかしさを思うより、率直なコミュニケーション、言葉のやりとり、気持ちのかけ合いが大切だと感じました。」「“はっ”とする言葉です。気が付かず、他人様にひどい言葉をかけているかも・・・と思われました。人を思いやる心を大切にしたいと思います。」「人はひとりでは生きていけない。」「胸に迫るものがありました。なにげに立ち寄ったのですが、今後の自分の生き方を考えさせられま



す。ありがとうございました。」「ほのぼのとしたやさしいタッチのまんがに思わず笑い、そして泣けました。希望をもらえました。」  
「あたたかい、ただひたすらにあたたかい!」「とコミュニケーションをとるのは難しいと思っていましたが、相手の気持ちや状況を考えるのが大事だと思いました。」  
「コロナ禍でますますコミュニケーションが取れなくなってきましたが、なるほどと考えさせられること、身に覚えのあることばかりです。漫画トーク、楽しみにしています。」「10年で終わってしまうのですか?残念です。素敵なイラストと内容。昨日来て本をいただいて帰りました。あつという間に読ませていただきました。妹にも持っていました。なにか心に残るといいなと思います」などの感想を頂いた。

トークは人数制限のあるなか 20 人ほどの参加者があったが、「出来る事は難しい事ではなくて身近な所からという事がしっかり認識できてとても良かった。」「心に響くお話でした。考え方で自分が変わると思いました。」「自分自身の子育てを振り返ることができました。」「家族をはじめ、スタッフの方々の協力もあり、団士郎さんの講演を聞く機会をもらえました。今まで少し自分の考え方をマイナスに見ていたのかなと思え、見方を変える方法を知ることが出来ました。子どものためにマイタウンへ来ましたが、自分のための良い時間となりました。ありがとうございました。」などの感想を頂いた。

とても喜ばれているので、今後も続けることができたかと思っている。



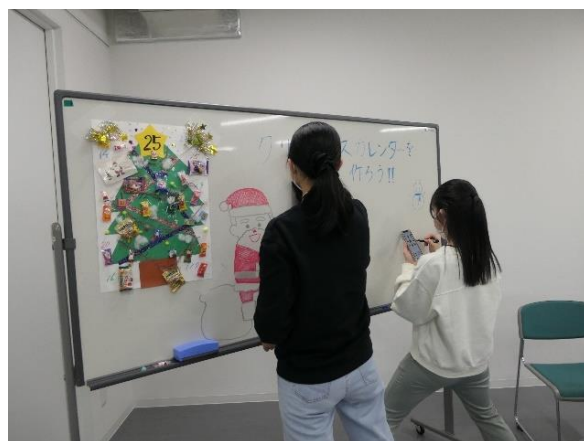
## カプラ

「カプラに挑戦しよう」は小磯さんが中心に運営してくれたが、ナイアガラを作るといことで、院生たちも頑張っていた。小さい子たちには難しいものだったが、ハラハラしながら見守り、崩れ落ちる音にそこに居合わせたみんなから一斉に歓声が上がるという一瞬にして凝縮された一体感が感じられるプログラムだった。



## クリスマスカレンダー

クリスマスカレンダーづくりには、9組の親子（こども13名、親11名）が参加してくれ、おひさま広場のスタッフさんや、白河高校2年の3名もボランティア参加してくれた。いつものように、子どもたちが工夫を凝らしてユニークなカレンダーを作り上げていた。「時間がかかったけどたのしかった（5歳女）」「たくさんの人にぼくのお手伝いをしてもらってありがとうございました。お菓子をたくさんはったり、飾りをつけたってたのしかったです。シールもあってよかったです（9歳男）」などかわいいアンケートも書いてくれた。







## EMANON 交流会

その後近くの EMANON で交流会を行った。EMANON は高校生対象のコミュニティ・カフェで、無料で自習をしたり、放課後活動に利用したり、ひとりで過ごしたりと、いろいろな活動ができる。室長の青砥さんは、福島には大学が少ないので、ご自身が高校生の頃、大学生が周りにおらず、大学ついて身近に触れる機会がなかったことからこのカフェを作ったという。スタッフは現役の大学生で、OB や OG、地域の大人もサポーターとして関わっている。ボランティアで参加していた高校生たちは震災当時 6 歳だったという。時間の流れを感じる。



## 12月5日 Fスタディツアー

白河でのプログラム終了後はマイクロバスでいわきに移動、古滝屋で夕食を取りながら反省会を持った。

最終日は、Fスタディツアー。子どもたちの絵でラッピングされたマイクロバスで檜葉の宝鏡寺にある伝言館を訪れ、浪江や富岡を案内してもらった。



## 伝言館

檜葉町の宝鏡寺にある伝言館では、原発が核であることを明確にし、広島、長崎、ビキニなどとの関連性のなかで福島原発事故の問題が扱われている。また、沖縄の米軍基地問題についての展示もあった。これは、館長、副館長たちが9月に準備していたものだった。「エネルギー・アレルギー」のポスターはインパクト大であり、今回は写真を撮っておいた（前はショックが多すぎたのか、写真を撮ってなかった）。



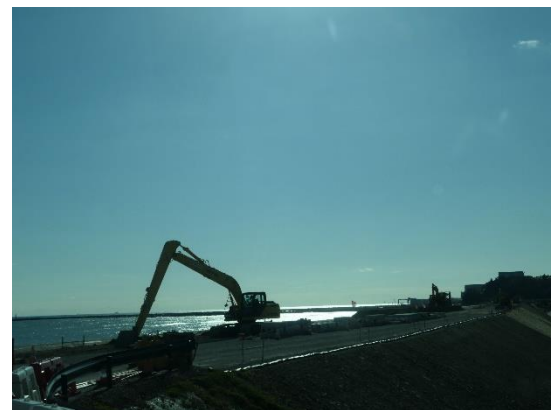




## 沿岸部(富岡・浪江)

私は9月の下見とほぼ同じコースだったが、沿岸部が初めての院生たちの衝撃は大きかったようである。

とくに富岡の沿岸部から福島第二原発がよく見える。この美しい海で地元サーファーが戯れていて、背景の第二原発との対比が何とも言えず複雑な気持ちになった。







富岡の街中には、廃炉資料館がある。また、公園には富岡町の人々の小さな慰霊碑もあった。ボランティアで作ったとのこと。大きな痛手を受けた公園の木々にも新しい芽が出て新しい枝が伸びているのだそう。途中、「福島再生」の書かれたバンが止まっていたが、ここで甲状腺検査をするのだそう。







桜並木で有名な富岡町夜ノ森周辺を歩いた。桜並木周辺は道路を除くと今なお立ち入り禁止区域になっており、バリケードが張られ、時間経過とともに朽ちつつある家や車がゴーストタウンのように並び、すでに解体されて空き地となったところには、黒いフレコンバッグが積み上げられ、それぞれの袋には放射線量を表す数字が書かれていた。



JR 夜ノ森駅まで行くと、線路を挟んだ東側は今も帰還困難区域とされる一方、西側は帰還困難区域解除となり、人々が生活をしている。常磐線とこの駅、線路を境に別世界が両側に存在する奇妙な現実が原発事故のすべてを象徴しているかのようである。来年には東側も避難解除される。







車窓からはたくさんのソーラーパネルが並ぶ光景を見た。汚染され田んぼとして使えなくなった土地を都会の大手企業が安く買ったとき、設置されているという。十年もすると、これは環境ごみになる。

ネットで見たことのある「富岡ヴィレッジ」という宿もあった。

マイクロバスの運転手さんは櫛葉出身で、第二原発で働いていた。クレーン車が折れて亡くなった人いたそうだと。里見さんが「フクシマ 50」を話題にしたので、「見られましたか」と聞くと、運転手さんは「怖くて見れない」と、里見さんも「先に話を聞いているから見る気がしない。ヒーローのように描く」とおっしゃっていた。

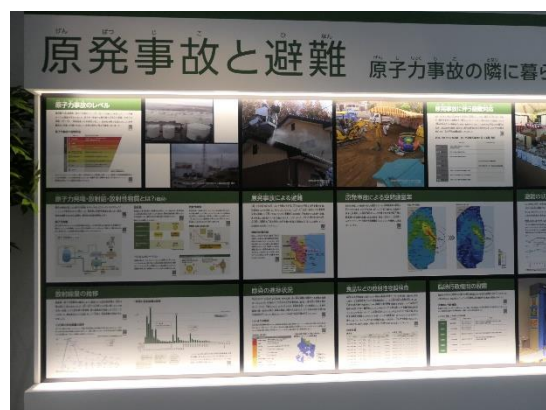
バスのなかで、里見さんが院生たちにいろいろなことを話してくれた。宿坊体験で食事を頂く際に、「この食べ物を食べるだけの価値がある人間か」と問われたことがある。命を頂いて、私たちは自分の生を支えているのに、生産現場で何が起きているかも、生産者の苦労も知らず、サービスをお金で買って消費している。福島で起きたことも同じで、原発事故で放射線被害にあったのは原発に隣接する地域だった。原発は都会で消費されるための電気エネルギーを作り出していたのに、消費者たちは原発事故のダメージを受けず、事故は過去の出来事として忘れられていく。でも、放射性物質は、現在も、そしてこれからもずっと街と自然を汚染し続ける。

お昼過ぎに解散し、それぞれでフィールドワークを続け、帰路に着いた。

## いわき震災伝承未来館

私は、いわき震災伝承記念館といわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11 いわきの東日本大震災展」などを訪れた。

いわき震災伝承記念館は海辺の高台にあった。津波被害、放射線被害など震災当時の様子が映像や写真で見ることができた。ピアノ展示があったが、これは津波被害にあった旧豊間中学校のピアノで、市内にあるピアノ店の店主が譲り受けて原状回復させ、今では「奇跡のピアノ」と呼ばれているものだそうだ。伝承とともに教訓、防災についてのコーナーもあった。





## いわき・ら・ら・みゅう

あまり時間はなかったのだが、伝承施設として登録されている「いわき・ら・ら・みゅう」まで足を延ばした。これは基本的に観光物産施設で、飲食店や土産物の販売が中心のようだった。一角に「3.11 いわきの東日本大震災展」というコーナーがあり、そこで、震災時のいわきの様子をパネルや映像で展示していた。

大惨事での苦難とともに、やはり、復興や未来といった人々を鼓舞するメッセージが溢れており、共感し、そうであって欲しいと希望する一方で、外部者は影の部分にも眼を向け、責任を背負い問い続ける姿勢が必要であることを心に刻まなければならないと思った。

## つづく

